

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月21日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16727

研究課題名(和文)20世紀前半のフランス前衛美術におけるレアリズムの問題とふたつの世界大戦

研究課題名(英文)Realisms in French Avant-garde Art from 1900 to 1950 and the Two World Wars

研究代表者

平田 裕美(松井)(Hirata, Hiromi)

名古屋大学・人文学研究科・特任講師

研究者番号：40774500

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、まずフランスで生まれた前衛芸術であるキュビズムの芸術家たちの作品分析をもとに、科学的な知識や機械への関心が新しい身体像を生み出していたことを明らかにした。さらにそれがどのようにキュビズム理論における「概念のレアリズム」と関わるのかを分析した。またキュビズムを取り巻く言説を分析し、二つの世界大戦という政治的な動きの中で「レアリズム」の意味が複層化していく過程を浮き彫りにした。とりわけ美術における「レアリズム」はナショナリズムと結びつく傾向があり、キュビズムの「概念のレアリズム」もその中で新しい定義を与えられていたことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、キュビズムを軸にしながら、新たな芸術が生み出した造形や理論が、歴史やユートピア、人間といった概念に新しいかたちを提供していたという事実について実証的に示した点にある。ただしこの「新しさ」には留保が必要である。というのも、とりわけ1930年代から40年代にかけては、その「新しい」ヴィジョンの意義を確かなものとして示すために、あえて「古い」価値観との関係を持ち出すこともあったからだ。「古典」や国家的な「伝統」、「人間主義」とキュビズムとの関係が盛んに論じられたのはそのためである。こうした研究成果は、今後、前衛の制度化の問題との関連から捉え直す必要があるだろう。

研究成果の概要(英文): In this research project, I examined firstly the process by which Cubist artists invented the new representation of human body inspired by the scientific knowledge and the vision of machines. Secondly I clarified how this innovative experiment in cubist paintings and sculptures was connected with the concept in Cubist theory, "conceptual realism". Finally I analyzed how Cubism was regarded in the discourse of art history and art critique from the 1920s to the 50s, and how it was related with the concept of realism which took multiple forms in the interwar period French culture. I clarified particularly that the cubist notion "conceptual realism" was also integrated in the relationship that the discourse on realism took at that time with the nationalistic thought.

研究分野：美術史

キーワード：キュビズム シュルレアリズム 第一次世界大戦 第二次世界大戦 レアリズム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

20世紀フランスの前衛芸術は、これまでの研究でも指摘されているように、自らの「起源」の探求の一環として、新たな時代の古典や伝統の定義を試みてきた。非現実的で難解な様式を特徴とするキュビズムの芸術家は、伝統とのつながりを主張する作品や文章を発表し、自らの前衛性と歴史的な正当性を主張している (D. Cottington, *Cubism in the Shadow of War*, 1998)。このことは、キュビズムにおけるレアリズムという概念が、現実の単なる模倣という営為を大きく逸脱し、新たな現実性の創造という理念として理解されていたことと、密接に関連づけられている (M. Antliff and P. Lighten, *A Cubist Reader*, 2008)。第一次世界大戦勃発後には、こうした精神性を引き継いだ前衛芸術家達が、大戦下の未曾有の惨劇に直面し伝統の追求を押し進めた結果、後に「秩序への回帰」と一般に呼ばれるような具象的な様式へと戻る傾向が認められるようになる (J. Clair [ed.], *Les Réalismes*, 1980; K.-E. Silver, *Esprit de corps*, 1989; E. Cowling [ed.], *On Classical Ground*, 1990; R. Golan, *Modernity and Nostalgia*, 1995; G. Boehm, *Canto d' Amore*, 1996)。しかし、これまでの研究においては、第一次世界大戦前の前衛芸術における古典主義は、芸術家や美術批評家により書かれたテキストの分析により論じられる傾向にあり、作品分析を通じた論証はおろそかにされてきた。また第一次世界大戦前の古典主義が生み出した非現実的イメージと、第一次世界大戦後の「秩序への回帰」における具象的イメージとの様式的な関係性についても、十分に論じられていない。私はこれまで、とりわけ博士論文の研究を中心に、キュビズムと解剖学との関係について注目した作品分析を行ってきたので、前衛芸術と科学という観点での切り口から、作品分析および言説分析の双方において新しい成果が出せるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、キュビズムが科学と結んだ関係の中で、「概念のレアリズム」と呼ばれる考えが重要な役割を果たすことになっていくことに着目し、1890年代から1950年代のフランス美術におけるレアリズムの問題に焦点を当てながら、20世紀前半の前衛美術がどのように同時代の政治・社会の現実、とりわけふたつの世界大戦をめぐる現実を描写しようとしていたのかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究では、該当する時代の作品・素描・批評記事・書簡・手記などの一次資料調査に基づく歴史学的手法を基盤としながら、美術史・科学史的な議論の交差する視座のもと諸仮説を構築し、これを資料・作品の分析によって確認するという手法を採用した。また、フランス前衛美術がイギリスの美術界の動向に対し有していた影響関係を視野に入れることで、美術批評を通じた英仏間の20世紀におけるナショナル・アイデンティティ形成の比較研究を試みた。

4. 研究成果

本研究では、まずフランスで生まれた前衛芸術であるキュビズムの芸術家たちの作品分析をもとに、科学的な知識や機械への関心が新しい身体像を生み出していたことを明らかにした。1年目は、キュビズムの彫刻家 R. Duchamp-Villon が科学的な知識を用いながらどのように有機的な統一体としての新たな身体像を模索していたのかを明らかにした。また1年目の後半以降は、第一次世界大戦とキュビズムの問題を分析した。なかでも人間の肉体と土とが混ざり合う情景が、キュビズムの画家たちやその影響を色濃く受けた芸術家において、幾何学的な言語で表現され、それがやがては機械化された肉体表現へと繋がっていくことに着目した。こうした傾向を戦前のキュビズムと比べてみた場合に、前者においては対象を幾何学化しながら自然や都市と人間とが融和する情景を描く傾向があったのに対し、後者の場合には外部世界に脅かされる人間像が登場する点に問題意識の違いが認められる。第一次世界大戦を契機に認められるようになるそうした動向が、やがてはダダやシュルレアリスムの「現実性」に対する新たな態度を導き出すことを仮説として提示した。こうした成果をふまえたうえで、1年目11月に国際シンポジウム「20世紀戦争のイメージ キュビズムからシュルレアリスムまで」を開催することで、戦争のイメージに関連する問題系を、文学・美術史分野の研究者とともに浮き彫りにした。このシンポジウムでは、ニューヨーク市立大学名誉教授 M. Ann-Caws を基調講演者として招聘したほか、国内外より計8人の研究者を迎え、可視性と不可視性、集合性と個性などについて論じた。さらにパリ・ロンドンでの調査を通じ、戦争文学と美術の関係も新たな課題として浮上した。また1年目12月に元ポワチエ大学教授クレール・バルビヨン (現ルーヴル学院総長) を招聘し、美術史および美術批評の形成と古典主義の関係についてディスカッションする場を設けた。

2年目は、上記のような傾向がどのようにキュビズム理論における「概念のレアリズム」と関わることかを分析した。ただしそれは、20世紀の前衛芸術がレアリズムと相容れないとするこれまでの一般的な見解に反するものであった。そこで、前衛芸術の全体像を描きなおすために、キュビズム理論の発展を支えた前衛芸術そのものが、どのように定義され、どのように分析されるのかということ、再考察の対象にする必要が生じた。このためトゥール大学教授ジョヴァンナ・ザッペリ、およびキングストン大学教授デヴィッド・コッティングトンを招聘し、前衛美術の誕生を社会的に考察する方法論や、そのフェミニズム的な考察方法についてディ

スカッションした。

3年目は、2年目の成果を踏まえ、キュビズムを取り巻く言説を分析し、二つの世界大戦という政治的な動きの中で「リアリズム」の意味が複層化していく過程を浮き彫りにした。とりわけ30年代、40年代のフランスにおいて美術批評の中で語られた「リアリズム」はナショナリズムと結びつく傾向があり、キュビズムの「概念のリアリズム」もその中で新しい定義を与えられていたことが判明した。大戦間期に複数化するこのようなリアリズムの定義が戦後どのような道行きを辿るのかを確認する必要から、ニューヨーク市立大学教授ロミー・ゴランおよびコートールド美術史研究所教授サラ・ウィルソンを招聘し、政治と芸術の関わりを明らかにするような研究会の開催を行なった。今後はこうした成果をもとに、戦後のフランス美術とアメリカ美術との関わりについても考察を広げる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6件)

1. 松井裕美「第3章「キュビズム文学」における科学者の視点と虚構の世界 マックス・ジャコブ『聖マトレル』とブレース・サンドラール『モラヴァジューヌ』」(145-188頁)

非在の場を拓く 文学が紡ぐ科学の歴史

中村靖子(監修)

春風社 2019年3月 ISBN:4861106354

査読なし

2. Hiromi MATSUI « La place du genre chez Pablo Picasso à la naissance du cubisme »

Transverse - genre et culture 97-110 2018年11月

査読あり

3. 松井裕美「レイモン・デュシャン=ヴィヨンの作品における人体の躍動 抽象と具象、運動と情動、音楽と舞踏のあいだの 往還(一九一〇～一三年)」

美術史 182 165-180 2017年3月

査読あり

4. 松井裕美「20世紀前半の前衛芸術における『現実』への問いとリアリズムの射程—モーリス・ドニカからウィングダム・ルイスまで」

美学美術史研究論集 (27) 37-52 2017年3月

査読あり

5. Hiromi MATSUI « Cubisme et poésie - « L' esprit cubiste » et les livres illustrés dans les années 1910 »

Textimage ; revue d' étude du dialogue texte-image 8 2017年

査読あり

6. 松井 裕美「狂気がかたちを成すとき : 二〇世紀初頭の芸術と図式的表現 (特集 障害と創造 : 当事者として向きあうために)」

REAR = リア : 芸術批評誌 (38) 45-51 2016年

査読なし

〔学会発表〕(計 14件)

1. 松井裕美「ピカソの名声形成の諸要因と自画像の展開」

18~20世紀フランスにおける著名作家たちの肖像 2018年11月24日 立教大学文学部文学科

2. 松井裕美「リアリズムとユートピア的なヴィジョン 1930年代のフランスにおける様々な『現実』概念の定義」

20世紀視覚芸術・文学における 前衛的リアリズム(1914~68年) 2018年9月28日 名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター

3. 松井裕美「キュビズムと公共空間: フランスの美術館における前衛芸術コレクションの形成(1918~1947年)」

フランス美術コレクションの形成・普及と国際化(1870~1950年) 2018年9月21日 東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化コース

4. Hiromi MATSUI "Return to the Utopia of Realities, but which Utopia, and which Reality? - Realism as a Form of the Avant-Garde in the Debates from 1934 to 1938 "

5. 松井裕美「20世紀フランスの美術理論における「造形的メタファー」に関する試論」
日仏美術学会第145回例会「20世紀フランスの美術理論における文学と視覚芸術の交差」2018年1月20日 日仏美術学会

6. 松井裕美「現実と超現実をつなぐ橋-ピカソの作品における梯子の表象」
もしもシュルレアリスムが美術だったなら 2017年12月16日

7. Hiromi MATSUI “Diagram of War Landscapes: The Two World Wars and Abstraction in Visual Culture”
Colloque international Paysage(s) de l' étrange. Art et recherche sur les traces visibles et invisibles des conflits : approches interdisciplinaires et inter-artistiques des patrimoines de guerre 2017年11月16日

8. 松井裕美「第二次世界大戦後のピカソの陶器制作と展示における「アナロジー」の思想?過去の継承と再解釈に関する一考察」
ピカソと人類の美術 2017年11月11日 京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室/日仏美術学会

9. 松井裕美「第一次世界大戦後の機械化された身体の表象」
20世紀芸術における 身体表象の 機械化と解剖学 2017年9月24日

10. Hiromi MATSUI « Les représentations du corps dans les dessins et les écrits de Duchamp-Villon: L' image biomorphe et son imagination liée à la mécanique de 1911 à 1918 »
Ecole de printemps 2017, Imagination 2017年5月8日

11. Hiromi MATSUI “Sport, hygiène et sexualité chez Pablo Picasso à la naissance du cubisme”
3rd International Congress Picasso, Picasso and Identity 2017年4月27日 Museu Picasso Barcelona

12. 松井裕美「20世紀視覚文化におけるダイヤグラム-パブロ・ピカソからハルーン・ファロッキまで」
人間と記憶 2017年1月21日

13. Hiromi MATSUI “Anatomic Landscapes and Wartime Experiences”
松井裕美
Images of 20th Century Wars, from Cubism to Surrealism 2016年11月12日

14. 松井裕美「レイモン・デュシャン=ヴィヨンの作品における身体像の展開と機械のイメージ、1913年-1918年」
第69回美術史学会全国大会 2016年5月27日

〔図書〕(計 2件)

1. 松井 裕美 『キュビズム芸術史 20世紀西洋美術と新しい 現実 』
名古屋大学出版会 2019年2月 ISBN:4815809372

2. Hiromi MATSUI(ed.) *Images de guerres au xxe siècle, du cubisme au surréalisme*
松井裕美編
Les Editions du Net 2017年11月 ISBN:978-2-312-05541-1

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。